

# JCSS Newsletter



## CONTENTS

- 1 ご挨拶
- 2 事業報告・決算に関するご案内
- 3 シンポジウムについて
- 4 理事会現体制のご報告
- 5 参加学協会の動向
- 6 イベントカレンダー
- 7 国際動向
- 8 事務局・問い合わせ

## 1. ご挨拶

越境する社会、越境する学問  
——ハロウィンとクリスマスから考える

理事長 遠藤薫

いつの間にやら年の瀬も押し詰まってまいりました。

きらびやかなクリスマス・イルミネーションが、凍てつく夜にはいっそう光り輝いて見えます。

それにしても「クリスマス」という行事は、今日では宗教や地域を問わず、世界中で楽しまれています。かつては、クリスマス・シーズンになると「キリスト教徒でもない日本人がなぜクリスマスで騒ぐのか」といったお約束の皮肉が眩かれたりしていたようですが、最近はそんな疑問も浮かばないほど、年中行事として定着しています。日本だけではなく、アジアやアフリカなどでもそんな風潮のようです。

このような現象を「文化のグローバル化」として語ることもできるでしょう。19世紀以降、「近代化」の名のもとに欧米の文化が世界の至るところに浸透してきました。20世紀後半から、その動きはさらに新たな相へとシフトしつつ、拡大してきたといえます。この現代の「グローバル化」においては、欧米文化が画一的に世界に広まるというだけでなく、それにとまなう「ローカル化」「グローバル化」にも社会学の関心が高まりました。

21世紀に入って、生活文化のグローバル化はまた新たな段階に入ったような気がします。その象徴的な例が、ハロウィンの隆盛です。ハロウィンは、欧米では秋から冬への移行の行事として、クリスマスとともに祝われてきました（クリスマスに比べると異端的な香りも含まれますが）。しかし、キリスト教を解禁するとほとんど同時にクリスマス行事を取り入れた日本でも、ハロウィンはこれまでほとんど省みられませんでした。が、この数年のハロウィン流行には、目を見張るものがあります。10月末近くになると、街中に奇妙なコスプレ（扮装）の若者たちがあふれ、DJ ポリスが交通整理をする様子が、テレビなどで盛んに取りあげられるようになりました。

私は、ハロウィンの突然の流行の背景には、インスタグラムなどのソーシャルメディアを媒介とした世界の劇場化があるとみています（遠藤編『ソーシャルメディアと〈世論〉形成』東京電機大学出版局、2016）。2017年の流行語大賞には、「忖度」とともに「インスタ映え」という言葉が選ばれました。イン

スタグラムに写真を投稿したときに「イイネ」をもらうことが目的化した行動が増えていることの表れです。「ハロウィン」の名のもとに、「イイネ」をもらえるコスプレを見せ合うこと。それが近年のハロウィンであるといえます。それは、リアルな空間（渋谷、原宿など）における自己呈示であると同時に、ソーシャルメディア上の、バーチャルかつグローバルな空間における自己呈示でもあります。リアルとバーチャルの境界が消滅したところに、現代の民俗行事が現出しているといえるでしょう。

19世紀のグローバル化は、物理的な境界を越えて進みました。21世紀のグローバル化は、リアルとバーチャルを越境して進みつつあります。そこに新たに現れるのはどのような社会なのでしょう？いえそれは、未来の話ではなく、すでに私たちが生きているこの社会そのものなのです。

従来あると信じられてきたさまざまな〈境界〉。それがやすやすと越えられていく「越境する社会」を考えるには、従来以上に、多面的なアプローチが必要と思われる。すなわち、「越境する〈社会学〉」が求められているのです。それは、歴史学、経済学、地政学、文化人類学などの隣接諸科学のみならず、自然科学領域にも及ぶと考えられます。

先人たちが営々と積み上げてきた個別専門領域の蓄積と、これまで十分な交流のなかった他領域との連携を、どのようにバランス良く実践していくことができるのか。軽やかに響くクリスマスソングと、酉の市のお囃子を両の耳で聞きながら、そんなことを考えたりしています。

来る年もコンソーシアムを通じて、社会学系専門領域がさらに社会に貢献することができるよう、みなさまと共に進んでまいりたいと存じます。

## 2. 事業報告・決算に関するご案内

当年度の事業報告・決算、並びに次年度の事業計画・予算は、2018年1月27日（土）の理事会・評議員会における決定後、直近の『社会学系コンソーシアム通信』に掲載いたします。

（事務局）

### 3. シンポジウムについて

来る2017年1月28日、日本学術会議大講堂において、社会学系コンソーシアム主催第9回シンポジウムを開催します。

#### 【テーマ】

高度経済成長期〈日本型システム〉から何を学ぶか

#### 【日時】

2017年1月28日（土）13:30～16:30

#### 【場所】

日本学術会議大講堂（東京メトロ千代田線「乃木坂駅」5番出口徒歩1分）

<http://www.scj.go.jp/ja/other/info.html>

#### 【開催趣旨】

現代社会における諸現象を考察する際に、われわれはその参照基準として、高度経済成長期を中心とした〈日本型システム〉の形成過程とその特性・問題点を位置づけている。しかしながら、現時点において、〈日本型システム〉に関する知見が共有されているとはいえない。こうした認識を前提に、〈日本型システム〉を再考することは必須の課題である。このシンポジウムでは、社会学の各分野で現代日本の諸課題に取り組む際に、〈日本型システム〉の特性と問題をどのように位置づけているのか、位置づけられるのかを、批判的検討を含めて議論したい。またこの作業をとおして、改めて戦後日本史を編んでいきたい。

#### 【開会挨拶】

遠藤薫

（社会学系コンソーシアム理事長、日本学術会議社会学委員会委員長、学習院大学教授）

#### 【報告】

〈戦後家族モデル〉再考

田淵六郎

（日本家族社会学会会員、上智大学教授）

労働における「日本型システム」論の反省と展望—高度経済成長期の位置づけを中心に—

中川宗人

（関東社会学会会員、東京大学社会科学研究所  
特任研究員）

カリキュラム政策の変遷における高度経済成長期の位置

岡本智周

（日本社会学史学会会員、筑波大学准教授）

「家族丸抱え」から「施設丸投げ」へ

—日本型“残余”福祉の形成史—

竹端寛

（日本社会福祉学会会員、山梨学院大学教授）

高度成長期における地域生活-労働連帯の浸食

中澤秀雄

（地域社会学会会員、中央大学教授）

#### 【討論者】

今田高俊

（日本学術会議連携会員、東京工業大学名誉教授）

山田真茂留

（日本学術会議連携会員、早稲田大学教授）

#### 【閉会挨拶】

野宮大志郎

（日本学術会議フューチャー・ソシオロジー  
分科会委員、中央大学教授）

（文責：シンポジウム担当理事

嶋崎尚子・岡田勇）

#### 4. 理事会現体制のご報告

2017年12月現在、コンソーシアム理事会構成員は、以下のようになっております。

なお、任期は2018年1月31日までであり、2018年2月1日以降の運営は、理事選挙（2018年1月実施予定）の結果にもとづき、新たな理事会構成員によって行われます。

理事長	遠藤 薫	（日本社会学会）	嶋崎尚子	（日本家族社会学会）
副理事長	浦野正樹	（地域社会学会）	谷口吉光	（環境社会学会）
理事	蘭 信三	（関西社会学会）	三隅一人	（日本社会分析学会）
	佐藤卓己	（日本マス・コミュニケーション学会）	山田信行	（日本労働社会学会）
	岡田勇	（社会情報学会）	好井裕明	（関東社会学会）
監事	赤川学	（日本社会学会）	太郎丸博	（数理社会学会）

（事務局）

#### 5. 参加学協会の動向

（2017年3月現在、50音順）

環境社会学会

関西社会学会

関東社会学会

社会事業史学会

社会情報学会

数理社会学会

地域社会学会

茶屋四郎次郎記念学術学会

東海社会学会

東北社会学研究会

東北社会学会

西日本社会学会

日仏社会学会

日中社会学会

日本解放社会学会

日本家族社会学会

日本看護福祉学会

日本社会学会

日本社会学史学会

日本社会学理論学会

日本社会病理学会

日本社会福祉学会

日本社会分析学会

日本スポーツ社会学会

日本村落研究学会

日本都市社会学会

日本保健医療社会学会

日本マス・コミュニケーション学会

日本労働社会学会

福祉社会学会

北海道社会学会

## 6. イベントカレンダー

2017年3月

14-15日 数理社会学会 第65回大会  
(成蹊大学)  
<http://www.jams-sociology.org/>

17-18日 日本スポーツ社会学会 第27回大会  
(順天堂大学 本郷・お茶の水キャンパス)  
<http://www.jsss.jp/>

5月

12-13日 社会事業史学会 第46回大会  
(東洋大学白山キャンパス)  
<http://shakaijigyoushi-gakkai.com/>

12-13日 地域社会学会 第43回大会  
(亜細亜大学)  
<http://jarcs.sakura.ne.jp/main/meetings/index.html>

19-20日 日本保健医療社会学会 第44回大会  
(星槎道都大学)  
<http://medsocio2018.yupia.net/>

6月

2-3日 関西社会学会 第69回大会  
(松山大学)  
<http://www.ksac.jp/%E5%A4%A7%E4%BC%9A/>

9-10日 環境社会学会 第57回大会  
(広島県福山市鞆の浦)  
<http://www.jaes.jp/seminar/>

23-24日 日本マス・コミュニケーション学会  
2018年度大会・春季研究発表会 (学習院大学)  
<http://www.jmscom.org/>

7月

28-29日 日本看護福祉学会 第31回学術大会  
(長野県看護大学)  
<http://kangofukushi.sakura.ne.jp/taikai/index.htm>

9月

1-2日 日本都市社会学会 2018年度大会  
(名古屋学院大学)  
<http://urbansocio.sakura.ne.jp/>

8-9日 日本社会福祉学会 第66回秋季大会  
(金城学院大学)  
<http://www.jssw.jp/event/conference.html>

15-16日 日本社会学会 第91回大会  
(甲南大学)  
<http://www.gakkai.ne.jp/jss/2018/09/15000000.php>

※ 2017年12月現在、各学協会ホームページ上に公開されているもの、並びに事務局までご連絡をいただいたものを掲載しています。

(事務局)

## 7. 国際動向

### (1) 東アジアにおける環境社会学の アカデミック・コミュニティ

浜本篤史

#### 著者略歴

浜本 篤史

名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授。博士（社会学）。環境社会学会理事および国際交流委員会委員長（2017.11 現在）。主著に「戦後日本におけるダム事業の社会的影響モデル—被害構造論からの応用」『環境社会学研究』21（2015）、『発電ダムが建設された時代—聞き書き 御母衣ダムの記憶』（2014）新泉社など。

\*\*\*

#### 国際会議というグランドでのプレイ

筆者がはじめて国際学会で報告したのは、2007年に北京で開催された環境社会学国際会議の場であった。それまで、中国の研究動向についてある程度の知識があり、コンタクトのある研究者も数名いたが、それでも駆け出しの研究者にとって国際会議での報告は心理的ハードルが高いものだった。英語による報告も自信がない。

そんなときに目にしたのが長谷川公一（2006）であった。「社会学や環境社会学の世界では、日本抜きの国際化が急進展している」という指摘は思い当たるところがあり、「30歳代・40歳代の会員は、なぜ国際会議での報告に積極的でないのだろうか」といった問いかけも心に突き刺さった。そして、「結局のところ、国際会議というグランドでプレイするのは私たち自身である。…（中略）…『決定力不足』は、サッカーだけの問題ではない。日本の社会学の課題そのものであり、日本の環境社会学の課題である」との結びを読むに至って、私は参加の意思を固めていたように思う。

### 東アジア環境社会学国際シンポジウム（ISESEA） と第6回台北大会

この北京での大会は、中国国内での環境社会学の学会組織立ち上げを機に洪大用教授（中国人民大学）が中心となって開催されたものであった（浜本2007）。ISAのRC24(Environment and Society)の地域会議とも位置付けられ、約120名の参加者が集った。この大会は、東アジアの環境社会学にとっても一大契機となり、韓国、台湾、中国そして日本の4カ国・地域による東アジア環境社会学国際シンポジウム（ISESEA, International Symposium on Environmental Sociology in East Asia）の第1回大会が翌2008年に東京（法政大学）で開催されることになった。2009年ソウル大会以降は隔年開催となり、2011年台湾大会、2013年南京大会と続き、2015年仙台大会（東北大学）からは二巡目に入ったところである。この間、ISAの2014年横浜大会など、主要メンバーは毎年のように顔をあわせる関係となっている。

そして本年10月、国立台湾大学を会場としてISESEA-6が台北で開催された。会議の運営は、高淑芬助理教授（佛光大学）を中心に、周桂田教授ら同大学社会科学院リスク社会・政策研究センターのスタッフによって主に担われた。米国における環境社会学の生みの親であるライリー・ダンラップ教授（オクラホマ州立大学）が地球温暖化のネガティブ・キャンペーンについて、台湾の環



境社会学研究をリードしてきた王俊秀教授（清華大学）が持続可能な社会デザインに関する基調講演をそれぞれおこなった後、2日間にわたって169名の参加と68本の一般報告があった（大会事務局調べ）。いずれも仙台大会を上回る規模であり、欧州など東アジア以外からの参加者も増えている。

各大会の運営にあたっては決まり事を多くつくらずに、資金調達も含めて開催国・地域の実情にあわせるスタイルをとっている。会員制度も持たず、東アジア以外からでも誰でも参加可能である。また、大会最終日にフィールド・トリップを設けること定着しており、仙台大会では女川原発や東日本大震災の被災地を視察し、今回は台風のため筆者は参加できなかったが、台湾北東部宜蘭県にある慈林教育基金会（台湾民主運動ミュージアム、台湾社会運動史料センター）を訪問するメニューが組まれた。

### 日本の環境社会学と国際化

ところで、東アジアとの研究交流は、2007年に突如はじまったわけではない。日本で環境社会学会の前身組織が結成されたのが1990年、学会の正式発足が1992年であるが、実は早くもこの時期から海外研究者との交流を図ってきた。

寺田良一（2009）に詳しいが、それは「国際社会学機構」神戸会議（1991）が出発点となっている。ここでアジアの環境問題が看過されていると感じた学会創設メンバーが、アジア5カ国から研究者や運動家を招待し、飯島伸子初代学会長の在籍する東京都立大学で「アジア社会と環境問題」国際シンポジウム（1993）を開催したのであった。ビザの発給など「今日では考えられないほど困難なことであった」と寺田が述懐する時代であったが、ここでの経験と出会いを基盤として、韓国や中国でも環境社会学の組織化が進むにともない、さらなる交流拡大の機運が高まってきたのであった。

海外交流の重視は、環境社会学が対象とする事

象が、国境を越える公害・環境問題であったことが大きい。とりわけ、日本によるアジアへの公害輸出について強い問題関心もあった。また、陳阿江教授（河海大学）が、「中国の環境問題にとって、欧米よりも日本の経験のほうが参考になる」と、十年以上も前から筆者にたびたび語ってくれるように、お互いに学びあう知的欲求と熱意も共有されてきた。こうして、上に挙げた以外でも韓国では李時載（カトリック大学）、具度完（環境社会研究所）、日本では堀川三郎（法政大学）らを含む「開拓者」たちが、決して形式的ではないコミュニケーションを通じて、互いを尊重しながら育んできた友情が土台となっているのである。

日本の環境社会学者にとって、もう一つ重要な動機もあった。それは、日本の社会学の実力が世界的に認知されるべきだとの考えである。船橋晴俊（2016）が「日本の社会学には膨大な蓄積があるのに、海外からみると、ほんの少ししか見えません」「正當に評価されていないと思うんです」（2013=イデオロギ-時）としばしば語っていた点であり、それは英語中心主義へのある種の反発を含みながらも、その舞台で勝負して日本およびアジアから発信していこうという使命感であった。

### 精神継承と次世代の交流へ

ISESEA など毎回の会議に参加して感じるのは、ある種の「開催国効果」である。持ち回りの開催地では地元の若い世代が多く参加し、環境社会学に触れる貴重な機会となっている。それは、共通する文化をもちながらも、必ずしも同質的とはいえない東アジア各国・地域の実情を学び、交流する機会でもある。同時に、お互いに非英語圏の出身であるという「ハンデ」を共有し、温かい雰囲気があるのもこのコミュニティの特徴であり、若い世代が「国際デビュー」を果たすのに格好の舞台となっている。

日本以外のアジア諸国では従来から、英語での発信が重視され、英文誌への投稿や学会発表も積

極的であったが、この十年のあいだに日本でも一般的なことになりつつある。今回の台湾大会でも、全 68 報告のうち最多の 27 本が日本からの報告だった。ただし、業績主義に基づく単なる発表の場になってしまっただけでは、もったいない（自戒を込めて）。『環境総合年表—世界と日本—』（2010）および A General World Environmental Chronology(2014)、陳阿江編『環境社会学是什麼——中外学者訪談録』（2017）のような成果物は、ISESEA や ISA を通じて育まれた「顔の見える関係」の賜物であろう。今後もこうした成果が生まれるためには、道なき道を歩んだ「開拓者」の精神継承が大事だと思われるのである。

#### [文献]

- 船橋晴俊（反訳・編集・補訂=堀川三郎・高娜・朱安新）「日本環境社会学の理論的自覚とその自立性」『社会志林』62(4) 21-33（2016）。
- 浜本篤史「中国における環境社会学の現在」『環境社会学研究』13：194-203（2007）。
- 長谷川公一「環境社会学の国際発信に向けて——世界社会学会議と『環境と社会』研究委員会」『環境社会学研究』12:165-177（2006）。
- 寺田良一「東アジア環境社会学の過去、現在、そして未来」『環境社会学研究』15:68-75（2009）。

## (2) Migrants Residential Space Attainment in Modern China: A General Typology

李蔚 (Wei LI)

\* \* \*

In the last 30 years, China has experienced a massive migration from rural to urban areas, which had a tremendous impact on the urban development. Accordingly, the large scale of population migration in the process of rapid urbanization has become a main research focus of Chinese Sociological academia. Since the nature of urbanization is not only centered on the change of migrants' geography space, but also reflected as the transformation of urban space in the historical process, a methodological strategy of space contextualization should be included to the migration studies. Specifically, a social-spatial perspective contributes to the sociological understanding of migrants' residential practice in the urbanization process.

By tracing an important time line, we attempt to construct a typological model for migrants' residential space attainment in the past 30 years. Such a typological model is composed of the main mode and the auxiliary mode. The main mode includes three types: the ethnic enclaves, urban village as transitional zone, and the marginalization of residential space. The auxiliary mode falls into four types: the dormitory labor regime, the domestic helper, the normalization of residential space, and the homelessness (Table1) .

By introducing the methodological strategy of space contextualization to this study, we obtained 7 types of special living space in the city that have been constructed by migrants since

1985. We incorporated the social change dimension and social dynamic dimension to explore social processes and mechanisms that affected migrants' living space attainment in the city.

Based on a theoretical explanation of all these types, we outline several social processes

and mechanisms for the migrants' residential space attainment in China's urbanization process. We argue that social patterns of the migrants' residential space attainment are resulted from the interaction of the social change factors and the social dynamic factors.

**Table1. A General Typology of Migrants Residential Space Attainment : 1985-2015**

Mode	Time Period	Sub-variety	Contents
Mainstream Mode	1985-1995	Ethnic Enclaves	- Among rural-to-urban migrants, migrant workers from the same native place tend to concentrate in the same place. When this concentration in the city is sufficiently dense, we may consider that place an enclave. Such ethnic enclaves are expanding rapidly in some metropolitan cities of China. The typical cases are "Zhejiang Village", "Henan Village", "Xinjiang Village" where migrants from the same native place settled down and formed defensive communities. Extensive studies on these ethnic enclaves have been conducted.
	1995-2005	Urban Village as Transitional Zone	- Suburban outskirts in metropolitan cities have been transformed into poor living spaces for migrant workers. They function as places that provide cheap and familiar accommodation space for low-end migrant workers and their family members. Migrants with different origins swarm into the same Village and live together with the native people.
	2005-2015	The Marginalization of Residential Space	- The expediting of the marketization of the housing estates has brought up two problems. One is the supply shortage of affordable housing in suburban areas of the city; the other is the rising rent price. As a result, the existing housing patterns for migrants have changed. In order to save money, migrants increasingly tend to join the group-oriented leasing or live in the basement.
Auxiliary Mode	1985-2015	Dormitory Labor Regime	- Accommodation provided by employers, including factory dormitories in the manufacturing industry, labor camp (temporary housing at construction sites) in the architecture industry, free food and accommodation in the service industry.
	1985-2015	Domestic Helper	- Domestic helpers including the housemaid, the home-nurse, the baby sitter and the driver. They live in their employers' houses, Demands for domestic helpers is increasing year by year.
	2005-2015	The Normalization of Living Space	- With the expediting of the marketization of the housing estates, few of the migrants with high income purchase the house and settle down in the city.
	2005-2015	Homelessness/Hobos and Urban Squatting	- Migrants who could not achieve accommodation through their own efforts or seek help from the social support system tend to become the urban homelessness.

**Table2. Social Processes and Mechanisms for Migrants' Residential Space Attainment**

Mode	Sub-variety	Social Change Factors	Social Dynamic Factors
Mainstream Mode	Ethnic Enclaves	<ul style="list-style-type: none"> <li>- Dominant industry niche</li> <li>- Functional position of the ethnic group in the city's ecological system</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- Primary relationship functions as the primary resource for mobilization and integration of migrants.</li> <li>- Social solidarity and social security are developed in the defensive communities.</li> </ul>
	Urban Village as Transitional Zone	<ul style="list-style-type: none"> <li>- Urban sprawl</li> <li>- Local people in the suburban areas change their livelihoods from farming to housing rental business.</li> <li>- City authorities change the governance pattern in the city centers.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- Migrant workers and native landlords live in the same house. They share similar rural culture and have intensive interactions, which is helpful for the construction of "feel like home".</li> <li>- The transitional zone functions as the special space for the reconstruction of migrants' identity.</li> </ul>
	The Marginalization of Residential Space	<ul style="list-style-type: none"> <li>- The cost of living and the average cost of the rent continue to rise.</li> <li>- The living conditions of the individual have become more disadvantageous in an atomized society.</li> <li>- The commercial capital has developed the unconventional living space in the city.</li> <li>- City authorities request for a sense of order conforming to the urban aesthetics.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- Migrants request for lower rents and shorter commuting times.</li> <li>- Even though more and more migrants choose to live alone in an atomized society, they still maintain the relationship that has brought from the native place.</li> </ul>
Auxiliary Mode	Dormitory Labor Regime	<ul style="list-style-type: none"> <li>- China has become the world's manufacturing center.</li> <li>- A structural demand of the labor force to invest more energy in manufacturing, construction, and service industry has arisen.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- The dormitory labor regime has led to the alienation of migrants to some extent, but the relationship that migrants has brought from the native place still functions.</li> <li>- The class identity has formed.</li> <li>-The potential of group mobilization has formed.</li> </ul>
	Domestic Helper (To live together with the employers)	<ul style="list-style-type: none"> <li>- The well-off family demands for concierge service (domestic help, childcare, gardening and decorating)</li> <li>- Under the one-child policy, the practice of childcare in middle-class family has changed. The demands for domestic helpers keep arising.</li> <li>- The demands for caring the elderly, especially the home health aids have been arisen in the aging society.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- Domestic helpers could obtain fresh knowledge about the city through living with their employers.</li> <li>- Domestic Helpers who provide services in the same community are possible to band together to exchange information and share resources.</li> </ul>
	The Normalization of Living Space	<ul style="list-style-type: none"> <li>- The influence of the "blue stamped residence registration"</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- Some of the migrants settled down in the city successfully.</li> </ul>

		policy; - The influence of the “school district houses” policy; - The influence of the “market-oriented urban house removal setting and compensation” policy -The expediting of the marketization of the housing estates	-Migrants engaged in a “citizenization” process spontaneously which is not dominated by the government.
	Homelessness/Hobos and Urban Squatting	- The transfer system of rural land-ownership - The alienation of social assistance system	- Homelessness as a free choice of a lifestyle - Occupying the share common areas as an expression of dissatisfaction with inequality of the society.

**References**

Gu, Shengzu, ed., 1994. *The Migration of Population of Contemporary China and Urbanization*. Wuhan University Press. (in Chinese)

Liu, Gu, 1999. “The Floating Population Concentration Areas in Beijing: Patterns, Structure and Functions.” *Geographical Science* 19(6): 1-7. (in Chinese)

Li, Wei, 2012. “Housing and Settlement Pattern of Migrants in Metropolitan Beijing: Toward an Empirical Study of Sha Village.” *Journal of the Sociological Society of West Japan* 10: 115-130.

Li, Wei, ed., 2015. “Migrants Residential Space Attainment: Patterns and Functions.” *Journal of Jiangsu Administration Institute* 4:67-73. (in Chinese)

Lu, Xueyi, 1991. *Contemporary Chinese Countryside and Contemporary Chinese Peasants*. Beijing: Knowledge Press. (in Chinese)

Lu, Xueyi, Jing, Tiankui, et al., 1994. *Chinese Society in Transition*. Harbin: Heilongjiang People’s Publishing House. (in chinese)

Tang, Wingshing and Him, Chung, 2002. “Rural–Urban Transition in China: Illegal Land Use and Construction.” *Asia Pacific Viewpoint* 43(1): 43–62.

**8. 事務局・問い合わせ**

- シンポジウム担当 嶋崎尚子・岡田勇
  - ニュースレター・コンソーシアム通信担当 谷口吉光・三隅一人
  - 事務局 山田信行  
事務局補佐 藤田研二郎
- E-mail : socconsortium[at]socconso.com  
 ([at]を@に変更してください)

発行 : 2017年12月